

書歴がかれのイマジネーションを覚醒した。マヤ人が数世紀にわたって置かれている悲惨な状況を知るにつけ、怒りを覚え、そのくびきから彼らを解放したいと熱望した」。

ところで、1761年12月8/9日におこなわれたハシント・カネクに対する尋問記録の最後の部分には次のように記されている。

「証言したとおりで、これ以上は知りません。本当です。誓いのもとに調書を確認し、本人は署名できなかったので、ホセフ・クレスポ総督閣下、マルドナド弁護士、ペドロ・セベラ公式通訳、ドミンゴ・バルディオ総督書記長が署名した」。

カネクは署名していない。その理由は、no supo (できない=書けない=字を書けない)と言っている。最初は、尋問記録がこういうフォーマットになっており、だれも署名などしていないのかもしれないと思った。しかし、実際は尋問を受けた57名のうち、10名は署名しているのだ。署名した者の職業をみると、テコー村の元カシケ、メリダ市サンティアゴ地区の聖歌隊指揮者、ティシュメアク村の書記、フントゥルチャク農場の人夫頭、ティシュメアク村の礼拝堂主任、ティシュメアク村の聖歌隊員、キステイル村の教会管理人、ティホロブ村の書記、そして2名が不明である。いかにも、字を書けそうな職業ではないだろうか。

別の資料では、「キステイル村から逃げ出したインディオのなかでもっともラディノ的な人物であり王とみなされるカネクが逮捕された。しかし、カネクはみずからの王宮であるワラ小屋で焼け死んだとされていたのではなかったか。この戦闘における逮捕とは焼き畑や家にいるインディオを驚かせ縄をかけるという単純な作業

にすぎなかった。兵士たちは任務を忠実に果たし500名以上の捕虜を連れかえった。この状況で総督と抜け目のない助役は計画の最後の仕上げにはいったのである。かれらはカネクの戴冠と大規模な先住民反乱の計画が存在したことを証拠づけるために、断固たる熱意をもって訴訟を進めようとした。かれらは被告、共犯者および証人など無知な人びとを幻惑するあらゆる方策を自由にふるうことができた。自分たちの思惑どおりに証言させるための有効な手段として拷問が使われた」と記されている。

この資料によると、総督たちはカネクなる人物をでっちあげたうえで、拷問を用いて無理やり証言させたとしている。これは極論だとしても、尋問のさいに「カネクが署名しなかった」という記述は、このテキストのもつ一種の「ほころび」であろう。これだけで多くのことを語ることはできないが、カネクが「修道院の図書館で本を読みふけたインテリである」というイメージは少しゆらぐ。また、カネクが尋問内容に不服で、署名を拒否した可能性もでてくるのである。

ギンズブルグが言うテキストを「逆なで」に読む作業は容易ではないが、他者が残した資料に「描かれた対象の実態」を読み込むこと、つまりそこに織り込まれてしまっている「ほころび」からマヤたちの生の声を聞く作業は、マヤの歴史研究者にとって避けては通れないアポリアからの脱出口だろうと思う。これに加えて、フィールド調査によって、現在のアメリカス世界を生きるマヤの人びとの姿を伝える作業も継続していきたい。

『コーヒーのグローバル・ヒストリー 赤いダイヤか、黒い悪魔か』（ミネルヴァ書房、2010

年) ㊦ 立命館大学他・小澤卓也

2008 年末、近所のスーパー内にあるカウンターだけのコーヒー店に、私は何気なく腰を下ろした。店員に勧められるままに中米ニカラグア産のスペシャルティ・コーヒーを注文したのだが、これがじつに繊細な味わいで美味しい。そのコーヒーがニカラグアのどこで収穫されたものか店員に尋ねたところ、その答えに私は驚いた。ヌエバ・セゴビア県の山間にある某農園だというのである。ホンジュラスと国境を接するニカラグアの辺境でつくられたコーヒーが、しっかりと品質管理され、トレーサビリティも確保された上で、私の住む京都市郊外のカフェまで運ばれているのだ。

私はすっかりグローバル化したコーヒー流通システムに感心すると同時に、不安な気持ちに陥った。その農園で先進国の消費者のためにコーヒーを育てている農民の賃金、労働条件、暮らしぶりが気に掛かったのである。思えば、かつて民族主義者のアウグスト・サンディエロが、農民ゲリラとともに解放区を構えたのがヌエバ・セゴビア県の山中であった。アメリカのニカラグア支配に憤り、反帝国主義を掲げて米軍と死闘を繰り広げたサンディエロ軍の拠点が、今やコーヒーの供給源として先進工業国に「開かれている」のを知り、私は何とも複雑な気分になった。もし彼が生きていたら、現状をどう見るだろうか。

このように、ラテンアメリカのコーヒー生産者は、コーヒーの取引を通じてアメリカ、ヨーロッパ諸国、日本などの消費者と経済的につながっている。21 世紀の初め、国際市場におけるコーヒー豆の貿易額は年間 800 億ドルを超えるようになり、一次産品としては石油に次ぐ巨大市場を形成している。コーヒーは人間が生きる

ために不可欠な栄養分を有さない嗜好品であるにもかかわらず、コメ、小麦、砂糖といった主要農産物の貿易額を上回っているのだ。特に国別で世界第 3 位のコーヒー消費国となった日本において、コーヒー消費量は今後もさらに伸びると見込まれている。

この動向に比例して、コーヒーに関する著書や訳書も多く出回るようになった。その大多数は、おいしいコーヒーのつくり方、コーヒーの薬用効果、有名コーヒー店の情報に関するものであるが、中にはヨーロッパ諸国のカフェと市民意識の歴史的関連性に関する考察、世界最大のコーヒー消費国アメリカを中心としたコーヒー文化史、アフリカ小農の視点からのグローバルなコーヒー経済システムの批判をテーマにしたものもある。近年、コーヒーに関する研究は、多様化しつつ深みを増してきている。

私はこうした著作の愛読者であるが、他方で世界最大のコーヒー生産地域であるラテンアメリカに関する情報が不足している点には不満を抱いてきた。コーヒーが日常的な飲物として世界に定着した 19 世紀末～20 世紀初頭、世界に流通するコーヒーの約 90 % (現在は約 60 %) を供給したのはラテンアメリカに他ならないからである。ラテンアメリカ産コーヒーに関する研究と分析は、コーヒー史について論ずる際の必要十分条件なのだ。しかもその過程は、各国の近代化政策と密接に関連しており、コーヒー生産・輸出業の浸透は人びとの生活を激変させた。つまりコーヒーは、近代化を進めるラテンアメリカ諸国の政治、経済、社会、文化を大きく規定しながら、ラテンアメリカ諸国と先進国とを経済的に結びつけ、さらに先進国の食文化にも多大な変化をもたらした。ならば、ラテンアメリカという途上地域のコーヒー産業を基軸として世界を見渡し、その歴史を整理し直すこ

とによって、いまだに根強い先進国中心の世界観に一石を投じることができるはずである。

また、この作業は時に学生や一般読者などから寄せられる率直な疑問「日本でラテンアメリカを研究して何の意味があるのか」、「ラテンアメリカ研究者は単なるオタクに過ぎないのではないか」に対する私なりの答えでもある。すなわち、ラテンアメリカ側から眺望することで、これまで見えなかった新たな世界像を可視化しようということである。私は前著『先住民と国民国家 中央アメリカのグローバルヒストリー』（有志舎、2007年）の執筆時にもこのことを強く意識していたのだが、どうしても中米地峡という自分自身の専門領域にこだわり過ぎた感は否めない（それにもかかわらず、その内容を高く評価してくださっている方々にこの場を借りて心より感謝したい）。このときの反省を何としても活かし、次作につなげたいとする私自身の切望もあった。

『コーヒーのグローバル・ヒストリー 赤いダイヤか、黒い悪魔か』の企画と執筆は、こうした熱い思いから始まった。大学講義のテキストとしても使い勝手が良く、社会人向けの教養書としても楽しみながら学んでもらえるような本に仕上げるため、図や写真をふんだんに掲載し、文体を柔らかく読みやすくし、できるかぎり中立的な立場での記述を心がけ、ユーモラスな表現も積極的に盛り込んだ。学術性をしっかりと保ちながら、複雑極まりないコーヒーのグローバル・ヒストリーを簡潔に整理するのは容易なことではないが、何とかその最低限の目標は達成できたのではないかなと思う。

私がとりわけ腐心したのが本書の構成である。いかにしてラテンアメリカ産コーヒーを中心とした「グローバル・ヒストリー（国境を越えて相互的に織りなされる世界史）」をわかりやす

く読者に伝えることができるか悩んだ末、以下のような3部構成でまとめることにした¹。

まず第I部では、コーヒーというモノが、ヒトの歴史や社会とどう関わってきたかについて説明する。ここでは、もともとアフリカに自生する雑木であったコーヒーの果実が人間社会に飲物として受容され、ヨーロッパ社会に多大な影響を与えながら、やがてアジア、ラテンアメリカ、アフリカの農園で大量に栽培される重要な農産物となった歴史的経緯について概観される。加えて、輸出農産品としてのコーヒーの品質や市場価値は、その収穫、精製、焙煎の方法に大きく規定されることや、その生産方法の選択は生産地域の自然条件、労働者の性質、土地所有制度などのありように左右されることが指摘されている。さらに、コーヒーに含まれるカフェインが消費者の身体にいかなる影響をおよぼすかについても概説されている。

続いて第II部では、世界最大のコーヒー生産地域であるラテンアメリカのコーヒーをめぐる歴史や現状について詳述する。主にブラジル、コスタリカ、コロンビアの3国が採り上げられ、各国のコーヒー産業に共通する特色とその相違点について比較しながら考察される。とりわけ国家形成と密接にかかわりながらコーヒー産業が確立された1870年代～1930年代の動向を注視しながら、ブラジルとコスタリカがきわめて

¹ 周知のごとく、近年グローバル・ヒストリー研究はたいへん活発になされている。いわゆる「帝国」研究のようなものから、人間の安全保障や環境問題にかかわる研究、そして本書のように一つの国民国家の枠組みで捉えることのできないモノの移動やその影響をたどる研究など様々である。それぞれの依って立つ理論も異なっている。このことを鑑み、本書ではある特定のグローバル・ヒストリー理論の類型にコーヒーの歴史をはめ込んでしまうのではなく、あえてコーヒーをめぐる事実と事実のつながりを地道にたどることによって世界的な結びつきを明らかにする手法をとった。本書のような「事実に語らせる」式の世界の描き方の是非については、グローバル・ヒストリー研究に取り組んでいる方々からのご意見を伺いたいところである。

対照的なコーヒー生産国モデルであり、コロンビアが基本的にその中間的モデルであることが明示される。この時期にブラジルとコロンビアがコーヒーを大量に生産したことが、その後の世界的なコーヒー・ブームにつながったことにも言及されている。また、上記3国の比較分析に学問的な広がりをもたせるために、ベトナム、エルサルバドル、グアテマラのコーヒー産業の特徴とその社会的意義に関する考察も加味されている。

最後の第III部においては、コーヒー消費国の歩んだ歴史と現状を描出する。まず、ラテンアメリカにおけるコーヒーの大量生産を背景に、アメリカがどのようにしてコーヒーという「南国のエキゾチックな飲物」を「国民的飲物」として受容し、世界最大のコーヒー消費国の道を歩んだかについて記述している。とりわけ1920年代以降、コーヒー企業によってなされた広告・宣伝戦略の徹底ぶりについて詳述されており、その中のいくつかの巨大多国籍企業が世界のコーヒー経済を牛耳っていくプロセスも解明されている。そして、アメリカのコーヒー大量消費文化の特色がヨーロッパ諸国のケースと比較しながら論じられた上で、ブラジルやアメリカの影響を強く受けた日本のコーヒー史も概観され、例えば缶コーヒーに代表されるような日本独自のコーヒー文化のありようも紹介されている。

そして、これらの本論とは別に、読者が関心を持つであろうトピックについてコラム欄も設けた。ここでは、現場の取材を通じて私が感じた印象や興味深い経験などについて、より自由に個人的感想を交えて著している。その中で、社会主義国キューバのコーヒー事情、ハワイ・コナ地区のコーヒー文化祭、日本スペシャルティ・コーヒー協会のイベント、沖縄におけるコーヒー生産のための努力、そして京都におけるカフェ

事情などについて紹介されている。これらの取材先ではたくさんの素晴らしい人々との出会いがあったが、とりわけ沖縄のコーヒー生産農園「ヒロ・コーヒーファーム」を営む足立さんご一家のコーヒー生産に傾けた情熱には強く心を打たれた。そうした私自身の感動や驚きが、コラムを通じて読者に伝われば幸いである。

このように本書は、農産物や商品としてのコーヒー（第I部）、生産国にとってのコーヒー（第II部）、消費国にとってのコーヒー（第III部）といった風に各部における分析視角を変え、各事象の接点を結んで網の目のように紡ぐことによって、コーヒーのグローバル・ヒストリーを立体的に浮かび上がらせるというユニークな構成となっている。このように重層的な構造にすることで、先進国や巨大輸入焙煎企業側から提示される偏った「コーヒーの世界」論を批判すると同時に、単純なラテンアメリカ礼賛主義や農民礼賛主義にも陥ってしまわないように心がけた。相互に関連するこれら3部を通読しながら、人間にとってじつに多義的な意味を持つコーヒーとの向き合い方について、読者自身に考えて欲しいのである。

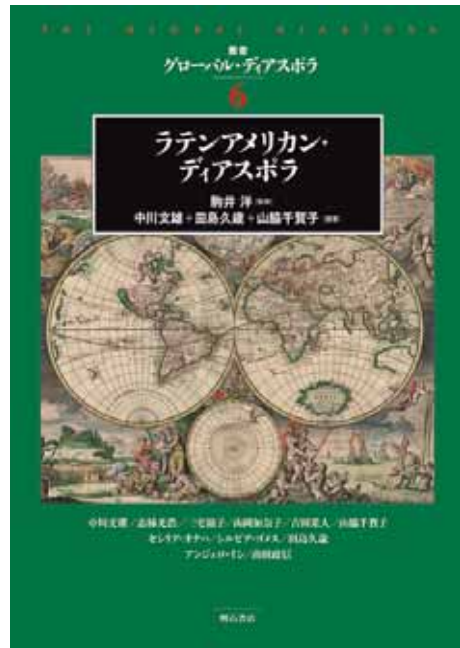
その上、世界最大のコーヒー消費国・アメリカと世界最大のコーヒー生産国・ブラジルを始めとするラテンアメリカ・カリブ諸国が隣接する南北アメリカが、ときに激しく対立し、ときに共通の利益を求めて手を結んだりしながら、世界的コーヒー・ブームの中核を担っている歴史のダイナミズムに注目している点にも、本書の特色がある。南北アメリカ大陸とカリブ海は、まさにコーヒー文化の発信地であると同時に、コーヒーをめぐる新自由主義経済問題や南北問題が次々と表出する現場の最前線でもある。現在の日本におけるコーヒー・ブームも、南北アメリカにおけるコーヒー産業の動向やその発信

する文化の影響を色濃く受けているのだ。

本書が実際に店頭やインターネットの店舗で販売されるようになったのは2010年3月初旬のことであり、現時点(2010年4月11日)ではいまだ読者の反応について総括するには時期尚早である。とは言え、早々に京都新聞(4月4日)と東京新聞(4月6日)でそれぞれ著者インタビューと「自著紹介」を大きく掲載して頂き、『サンデー毎日』(4月18日増大号)の「本棚の整理術」欄で大きく取り上げて頂いたこともあり、幅広い読者から様々な意見や感想が寄せられることを、私は期待と不安の入り交じった気持ちで待っているところである(本書を取り上げてくださった京都新聞の岩本敏朗氏、東京新聞の田島力氏、サンデー毎日の緑慎也氏にこの場を借りて心より感謝したい)。日本のコーヒー・ファンがただ美味しくコーヒーを飲むということだけでなく、本書を通じてコーヒー文化の背後にある世界の政治・経済・社会的事情について思いをめぐらし、その過程でラテンアメリカにも多少の興味を持ってくれたなら、筆者にとってこれほど嬉しいことはない。

今後は、本書の内容を踏まえた、ラテンアメリカにおけるコーヒー生産業の特色とその社会的意義に関するより専門的な学術書の執筆や、インディゴ(藍)やバナナなどコーヒー以外のラテンアメリカ一次産品を基軸としたグローバル・ヒストリーの研究に取り組んでいきたい。そのためにも、ラテンアメリカ研究に携わっておられる専門家の皆様から、ぜひ本書の内容や構成に対するご意見、ご感想、ご批判を頂きたいと切に願う次第である。

『ラテンアメリカン・ディアスポラ』(中川文雄・田島久歳・山脇千賀子編著、明石書店、2010



年) 城西国際大学・田島久歳 / 文教大学・山脇千賀子

本書は「叢書グローバル・ディアスポラ(全6巻)」(明石書店)の第6巻として企画されたが、本書の構成に関しては編著者3名が「ラテンアメリカン・ディアスポラ」という主題に基づいて独自に執筆者の選定および執筆内容の決定を行った。章立て(カッコ内執筆者名)は以下のとおりである。

はじめに

序章 アメリカ大陸をめぐる人の移動(中川文雄)

第1章 プエルトリコ人ディアスポラ(志柿光浩・三宅禎子)

第2章 米国におけるキューバ人ディアスポラ(山岡加奈子)

第3章 米国におけるメキシコ人ディアスポラ(吉田栄人)